



自転車に乗りながら考える

伊村靖子

はじめに告白しよう。私は過去10年以上、ロードバイクやマウンテンバイクのようなスポーツ自転車はおろか、ママチャリにすらほとんど乗る機会がなかった。言うまでもなく、マイ自転車は所有せず、移動はもっぱら公共交通機関に頼って生活してきた。その生活が一変するきっかけとなったのは、2016年4月、大垣への引越しである。奇しくも、赤松正行が「クリティカル・サイクリング」を立ち上げるタイミングに、ロードバイクに乗り始めることとなったのである。

それまで東京都内を活動の拠点としていた私にとって、最初に自転車ブームに接したのは、2011年の東日本大震災後であった。都心の公共交通の脆弱性が露呈したことに加え、反原発、地球温暖化をはじめとした環境問題に対する注目、健康志向の高まりなどから通勤に自転車を利用する人口が増え、自転車ブームが巻き起こったと考えられる。一方で、しまなみ海道などに代表されるようなサイクリングロードがレジャーとして注目を浴び、日本国内の各地にサイクリングロードが整備されつつあることを知る。こうしたブームに半信半疑ながら、岐阜への転職でひらめいた。引越しに探索はつきものだ。まずは大垣周辺を知るためにと自分に言い訳しながら、念願の自転車を手に入れようと決意する。

ビギナーズラックという言葉があるが、この時ほどその幸運を実感したことはない。5月15日午前8時にIAMASを出発して、木曽三川公園で試乗会に参加。昼食の後、1時間ほどカマーに乗って休日を満喫し、帰路の揖斐川沿いに差し掛かる頃、その瞬間は訪れた。追い風に乗って走る心地よさを知

ってしまったのだ。結局、初めてのライドで70kmを完走。以来時間を見つけてはライドに繰り出すこととなった。

さて、ここで私なりに「クリティカル・サイクリング」について考えてみたい。私にとってライドは一言で言うならば、発見的だ。これは、単に知らない土地を探索し、発見するという事実にとどまらない。実際に自転車に乗るようになって、むしろありふれた風景を再発見できる可能性の方に期待をもつようになった。それを裏付ける条件はテクノロジーだ。テクノロジーを介して、生身の身体が自然と出会う条件を思考する。この「条件の設計」には、都市計画のような規模からウェアをまとう個人の身体のコンドিশョンの定量化まで、さまざまなレベルがある。また、環境の設定は選択的だ。サイクリングの手段ひとつとっても、バイクシェアシステムの利用、複数の交通手段（サイクルトレイン、渡船、電動アシスト自転車など）の組み合わせにより、かなりの自由度があることを知る。最適化ではなく、使い手の論理で快適な解を発見する余地がある。そして、あらゆる環境について思考することはクリティカルという俎上においては地続きなのである。

かつて、カウンター・カルチャーにおいて都市から離脱して自然の中に作られた新しいコミュニティのための情報やツールを紹介した『The Whole Earth Catalog』（1968～1972）は、スティーブ・ジョブズが影響を受けたと語ったことで今では伝説となったが、思想をカタログ化してみせることで同時代に発信する、画期的なメディアであった。世紀が変わり、自転車というメディアを通して「クリティカル・サイクリング」がカタログ化できるものは何なのか。構えずに、まずは引き続き、乗りながら考えてみたい。